

研究ノート

## 「エヴォラ屏風下張り文書」修復記

伊藤 玄二郎

Record of the Restoration of the Évora Nanban Byobu Under Layer Sheets.

ITOH, Genjiro

キーワード：エヴォラ屏風

### はじめに：エヴォラ屏風下張り文書との出会い

日本に初のプロレタリア文学雑誌『種蒔く人』を創刊した小牧近江「異国の戦争」の中に次のような一節がある。「ある事変が、何かのきっかけに、突然、どっかり爆発するためには、長い間いろんな形になって発酵しているものだ」。

門外漢の筆者が何故ポルトガルへ渡った南蛮屏風の下張りの修復を長年しているのか。それには小牧が言う「発酵」を語らなくてはならない。

作家・遠藤周作さんに誘われて、日本ポルトガル協会のメンバーになった私は、1993年の「日本ポルトガル友好450周年記念行事実行委員会」のプロジェクトに加わり、様々な取材や調査でポルトガルを訪れる機会があった。その中で出会ったのがポルトガルの古都・エヴォラの古文書館に所蔵されていた「屏風の下張り」である。それが日本の歴史の重要な史料であることは、作家・永井路子さんから折に触れて聞かされていた。

エヴォラは、ポルトガルの首都リスボンから車で2時間ほど南にある城塞都市である。ローマ人がイベリア半島を支配した紀元前にすでに栄え、ローマ時代の神殿遺構やイスラム文化の香りものこる歴史の町だ。またエヴォラにはイエズス会の神学校があり、世界にポルトガル船で派遣された宣教師たちはここで養成された。

1582年2月（天正10年1月）、織田信長が本能寺の変に倒れる半年前に巡察師・アレックスサンドロ・ヴァリニャーノと共に長崎港を船出した天正遣欧少年使節の伊東マンショ、原マルチノ、中浦ジュリアン、千々岩ミゲルの4人の少年は1584年8月、2年余の航海を経てリスボンに上陸した。少年たちはリスボンやエヴォラで研鑽を積みローマをめざした。

1585年3月、ローマに到着した4人の少年は当時の教皇グレゴリウス13世に謁見し、温かい歓迎を受けた。その途次、彼らはこの古都のエヴォラ大聖堂でパイプオルガンを演奏し

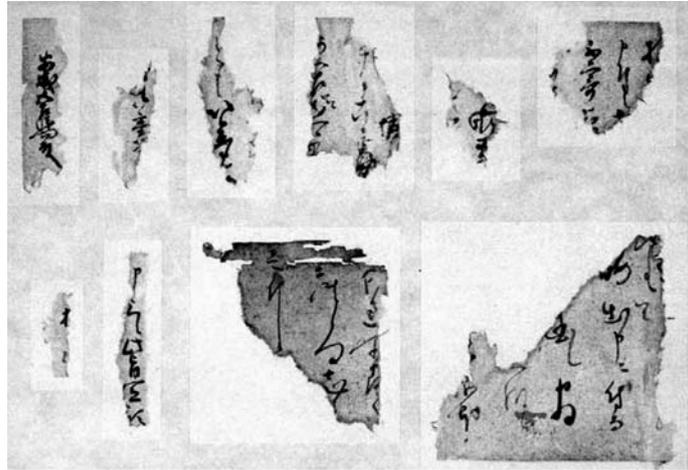


図1 書状・断簡

ている。

少年たちが帰国したのは1590年7月（天正18年6月）。長崎港を歓呼の声に送られてから8年余の月日は、キリスト教をめぐる日本の情勢を大きく変えていた。それを物語る「文書」もこの本文の中に取り上げている。

1991年、筆者は1993年の「日本ポルトガル友好450年」記念の年に発行を予定していた「図譜ポルトガル」の取材でポルトガルを訪れた。リスボンでの打合せが終わるとエヴォラに足を運び、エヴォラ古文書館の館長であり図書館の館長をつとめていたイザベル・シッド博士にお会いした。その折に見せていただいた屏風の下張りに使用された古文書は、筆者には判読が難しいものであった。当時、読むことはおろか、その史料の持つ価値を知る術を知らなかったポルトガルの人々が、4世紀の間この文書を大事に保管してくれていたこと、ある種の感動を覚えた。

しかし、400年の時を経た古文書は、誰の目にも傷みの激しさが分かるものだった。このままでは日本とポルトガルの歴史的、文化的な交流を示す貴重な史料が、朽ちてしまうかもしれない。通称「エヴォラ文書」と呼ばれる古文書の修復を急がねばならないという思いが浮かんた。

そのときの「思い」が「形」になった経緯についても記しておきたい。

1997（平成9）年5月、愛知県での万国博覧会（2005年開催）を誘致するためのポルトガルへの使節団に協力を求められた筆者は、その後、総理大臣となる小渕恵三氏を代表とするミッションに加わりリスボンに滞在することになった。その合間を縫って、当時の通産省や21世紀万博全国推進協議会の関係者をエヴォラに案内し、エヴォラ古文書保存への協力を要請した。その結果、通産省や「協議会」ばかりでなく、日本たばこ産業株式会社（JT）の協力を得て「文書」の修復が実現し、記録集は『エヴォラ屏風』修復保存、出版実行委

員会」から出版された。

## 1. エヴォラ屏風下張り文書の発見

### 1) 屏風の下張り文書とは

現在、日本の都会の家庭生活の中で屏風を使用することは少なくなった。しかし社寺仏閣や日本旅館、あるいは地方の旧家で目にする機会はまだ多い。

屏風や襖をつくる時、その下地骨に幾層にも紙を張る。これを「下張り」という。下張りは、さまざまな工夫がされている。たとえば、屏風全体を補強するための紙。補強した紙を束ねるための紙。屏風に膨らみをもたせるために使う紙。それぞれの紙を、その用途によって、厚手のもの、あるいは薄手のものをとりまぜ、通常、われわれが目にする屏風絵の下には、芯となる部分を挟んで10層前後の紙が重ねられ、張り合わせてある。屏風一曲（扇）には通常200～300枚の紙が使用されている。

昔は紙が貴重だった。室町・江戸期には通称紙売業なる商いが盛んだった。彼らは社寺仏閣や大店の商家などを廻り、不要になった大福帳、手紙文書類などの、いわゆる反故紙を回収し経師屋へ持ち込んだ。それが屏風や襖の下張りに使用された。そのため、エヴォラの屏風の下張り文書のように、時として、屏風や襖を修理するときに貴重な古文書が発見されることになるのである。

### 2) 村上直次郎による下張り文書の発見

エヴォラ屏風下張り文書（以下「文書」）があらたな歴史を刻みはじめるのは、1902（明治35）年、リスボン国立図書館を訪れた日欧交渉史の権威、村上直次郎（1868～1966）が、屏風の下張りから興味深い古文書を“発見”したことによる。村上は東京外国語学校・東京音楽学校・上智大学などで学長を務めた。

村上が発見した文書は次の通りである。

- (1) パアドレ・ルイス・フロイスの署名したポルトガル文書状
- (2) イルマン・ヴィセンテ、安威五左衛門尉志門等の日本往復文書数通
- (3) 小西如清ほか2名のパアドレ・オルガンチーノ宛書状
- (4) オルガンチーノよりヴィセンテ宛日本文書状

ルイス・フロイス（1532～1597）は、1563（永禄6）年に日本の土を踏んだポルトガルの宣教師である。初め九州で、のちに上洛して信長の保護を得てキリスト教を布教し、長崎で没している。その著述『日本史』は、16世紀半ばから末年にかけての日本での布教についてのみならず、当時の日本の政治状況について知るための重要な史料となっている。

安威五左衛門は豊臣秀吉の右筆で、いわば秘書役だった人物だ。秀吉の有力な家臣のなかには五左衛門はじめ高山右近（1552～1615）、小西行長（～1600）らキリシタンが少なくなかった。小西如清は行長の兄である。

オルガンチーノ（1530～1609）は、イタリア生まれのイエズス会士で、1570（元亀元）年

に来日した。信長に厚遇され、京に南蛮寺（教会）、安土にセミナリオ（神学校）を開設した。伴天連追放令で小西行長領の小豆島に潜伏。その後長崎に移り亡くなっている。

それらの文書が、エヴォラ図書館にあった金屏風の下張りを剥いだところ姿を現したものであることを知った村上は、同図書館を訪れて、さらに『司 Pe 御屏風云々』と書かれた文書を発見した。村上が発見した文書一部は、その後、1983年、歴史学者の中村質が再び目にするまで、80年の長きにわたって行方不明とされていた。

### 3) 新発見の「カテキズモ」「入満心得」

1941（昭和16）年、エヴォラ図書館の当時の館長シルヴェイラは偶然、保管されていた屏風の残骸から相当数の文書を見つけた。後に下張りに使われていた文書は、「巡察師ヴァリニャーノの宗教論と講義録」だったことが判明した。

巡察師ヴァリニャーノは、信長が明智光秀によって本能寺に倒れる2年前の1580（天正8）年、豊後（現在の大大分県）の臼杵にキリシタン・バテレン（司祭）を養成するための修練院（ノビシアド）を開設した。生徒は日本人とポルトガル人の12人だった。ヴァリニャーノは自ら教壇に立ち、通訳はルイス・フロイスがつとめた。講義録はやがて日本語に翻訳され、日本にイエズス会の教えを広めるための教本として使用されるようになる。

ヴァリニャーノはまた「日本宗教論」を執筆し、講義録ともども携えて畿内にのぼって信長に拝謁した。安土には当時すでにセミナリオ（神学校）ができていた。セミナリオは「本能寺の変」で焼失し、セミナリオの関係者は京に逃れた。

戦後になり、1960（昭和35）年歴史学者の松田毅一がエヴォラ図書館を訪れた。松田は、先の1941年、シルヴェイラ館長の見つけた文書を確認するとともに、さらに新しく発見した下張り文書を図書館の職員を助手に解体、採録した。松田は、リスボンとエヴォラで見つかった文書を、次のように確認し区分している。

- (1) 第1グループ 村上直次郎が発見し行方不明になっていた文書。（すでに触れたが、その後この文書は1983（昭和58）年に中村質によって“再発見”された。）
- (2) 第2グループ 松田がエヴォラ図書館を訪れる以前に、既に剥がされて保存されていた文書。
- (3) 第3グループ 松田が発見し解体した文書。

第3グループのほとんどは「ヴァリニャーノのカテキズモ」「オルガンチーノの入満（イルマン）心得の事」という日本語の文書である。「カテキズモ」とは、キリスト教についての「教理問答書」のことで、教理の講義をも指したが、ヴァリニャーノの「カテキズモ」は修道士（入満）を志願する日本の神学生に向けて書かれた。日本人の伝統的、異教的な観念を捨てて、イエズス会士にふさわしい教養と道徳を身につけること、キリシタン教理と信仰生活のあり方を説いている。「入満心得の事」は、修道士の志願者に対して、キリスト教会におけるヒエラルキー、たとえば、目上の者に対してはこのような振る舞いをしてはならないといったようなことが書かれている。

筆者は、以上の松田が1960年に再確認したリスボン、エヴォラの2か所の図書館、古文

書館に存在する「文書」を第1次プロジェクトとして修復した。

付言すれば1902年に最初に村上直次郎が発見したときの屏風は、屏風の絵は剥がされていて、わずかに屏風の縁に桐の紋様の紫色の布が残されていただけだった。屏風の絵柄はどうであったかは定かではない。

## 2. 「文書」がポルトガルに渡った経緯

### 1) イエズス会の役割

屏風、古文書は、なぜエヴォラ（一部はリスボンに存在）にあったのか。

イエズス会は1534年、スペイン北部、バスク地方出身のイグナシオ・デ・ロヨラら7人の同志によりフランス・パリで始まったカトリックの男子修道会である。その有力な同志のひとりだったのが、日本に最初にキリスト教を伝え、西洋文化を紹介した宣教師のフランシスコ・ザビエルである。イエズス会は、大航海時代によって“発見”されたアメリカ、アジアへの宣教、勢力拡大を図った。その目的を達成するために、教えの学習の強化、信徒の信仰生活の深化、そして、宗教にとどまらず全ての学問を対象にした調査研究と青少年への教育の重視を掲げた。

以上のような目的で誕生したイエズス会の、ポルトガルでの拠点がエヴォラだったのである。1559年からは世界各地に派遣されるイエズス会の宣教師は、エヴォラで教育を受け世界の各地へ派遣された。そして各地でのミッションを終えると、多くの宣教師は再びエヴォラに戻って来た。とすればエヴォラに、世界各地から重要な文書や書物、そして情報が持ち込まれたとしても、なんの不思議もない。

しかし、やがてイエズス会に大きな転機が訪れる。ポルトガルの政治や社会に大きな影響を及ぼし、時には王権と対立するまでの存在となったイエズス会に、政治家や思想家、そしてカトリック教会の内部からも批判の声が高まっていた。

時の宰相ボンバル独裁に反感を抱く貴族たちが、国王ドン・ジョゼを殺害しようと企てた陰謀にイエズス会も加担したとみなされた。1759年、イエズス会士はポルトガル国内から追放されてしまう。同時にポルトガルにおける、イエズス会の拠点であったエヴォラの地位も失われてしまったのである。

イザベル・シッド博士は、エヴォラに集積されていた文化遺産はその後、1802年からエヴォラの大司教となり、リスボン国立図書館、エヴォラの公共図書館の設立に大きな関わりを持ったフランシスコ会士リズボアの手によって、リスボン、エヴォラ、そして他の図書館等に分散された可能性は十分に考えられると言う。

### 2) 出所は安威五左衛門家か

九州大学文学部教授を務めた歴史学者の中村質は、1902（明治35）年にリスボン国立図書館を訪れた村上直次郎が発見した古文書は、エヴォラから見つかった一連の文書と同じ屏風から取り出され分離された可能性を示唆している。1998年7月、筆者はトーレ・ド・トン

ボ国立古文書館に京都国立博物館の工房で修復した「文書」を返還したその足で、イザベル・シッド博士とともにリスボン国立図書館を尋ね、村上がかつて目にしたと思われる文書を確認した。その状況や内容等から、まず、それは筆者もシッド博士も「エヴォラ屏風下張り文書」の一部に間違いはないという確信を得た。

中村質は、1988年に出版した著書『近世長崎貿易史の研究』（吉川弘文堂）に次のように書いている。

「従来のエヴォラ文書と今回再確認のリスボンのそれは、(中略)一つの屏風(六曲らしい)の下張りであること」「両所の書状類の年次は、リスボンのそれから天正13(1585)年を中心に、前後のせいぜい1、2年間のものと考えられ、同10年以前の信長期(安土セミナリオ期)に遡る根拠は見出し難い」「手がかりとなる古文書を、便宜的に秀吉の家臣団関係とキリシタン関係文書とに大別したが(中略)書状の宛所は安威五左衛門がきわだって多く、屏風文書が秀吉の右筆・奏者・代官で、シモンの霊名を持つ安威五左衛門家から出た可能性が大である。他面、かかる安威が秀吉に近侍したことは、キリシタン勢力の発展にとって、陰に陽に大きな支えであったに違いない」などである。

安威五左衛門については、五野井隆史氏の「秀吉の周辺におけるキリシタンの活動」(『エヴォラ屏風の世界』)に詳しい。安威は秀吉の秘書役となる以前、高山右近に仕えていたとルイス・フロイスは『日本史』に書く。五左衛門がキリスト教の信者になったのは、キリシタン大名高山右近の影響とも考えられている。

中村は同じ著書で、当時の屏風の「商品価値」を「(これらの文書を)下地にした日本屏風は当時の代表的な輸出品の一つ」と位置づけ、「エヴォラ文書」が下張りとして使われていた屏風が「信長が巡察師ヴァリニャーノに贈り、さらにローマ教皇に献上した安土城を描いた屏風同様、この屏風も長崎からポルトガル船で積出されたことは疑いをいれない」との結論を下している。

だが、果たして、誰がどのような目的で、キリシタンに関係する大量の古文書を下張りにした「エヴォラ屏風」をつくり、どのようなルートで海外へ運びだしたのか、そのナゾを探る航海の先はまだまだ長い。

### 3. 安威家の3点の「下張り文書」

安威家から出たとされ、エヴォラ古文書館、リスボン国立図書館に所蔵されている興味深い3点の下張り文書をここに紹介する。

1) 安威五左衛門書状

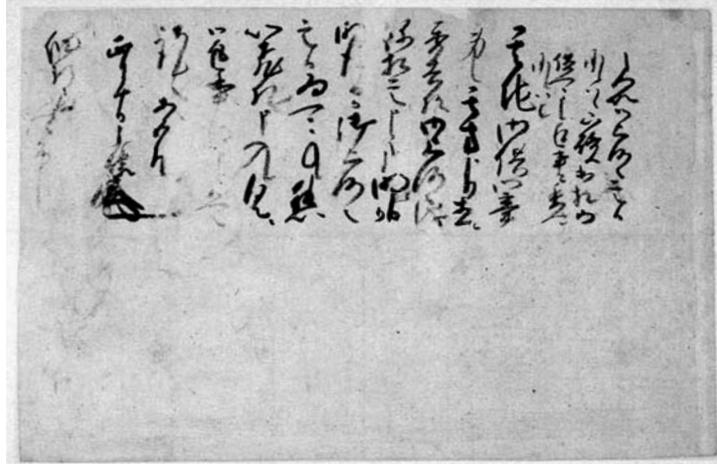


図2 安威五左衛門の書簡

原文

「尚以御上洛候定日  
承候ハ 山崎へわれ御  
供可申候。返事二委可承候。以上。  
其地御供御寄  
身之其方より直二  
秀吉様御上洛之儀  
弥相定申候哉。明日か  
明後日か御上洛之  
定日為可承候。態  
以飛札申入候。具二  
御返事[ ]  
安 五左  
正月十日 了佐(花押)」

本書簡の内容について海老沢有道・松田毅一は『エヴォラ屏風文書の研究』の中で次のように述べている。

洛中にある安威が本能寺の変の後、山崎の宝寺(宝積寺<sup>ほうしやくじ</sup>)に新城を築いている秀吉の側近に宛てた書状である。秀吉がいつ上洛するのか。その日取りが決まれば自分(安威)は出迎えに行く用意がある。知らせて欲しいという内容だ。書状の正月10日は、1583(天正11)年。秀吉が滝川一益・柴田勝家の動きを読み、前年末、近江長浜城の柴田勝豊を開城に追い

込み、ついで岐阜に信孝を囲み、勝家の南下に備え、近江北辺に城壁を構築していたところと  
考えられている。

一枚の書状が当時の武将たちの緊迫した様子を知らせてくれる。

## 2) ルイス・フロイスの手紙

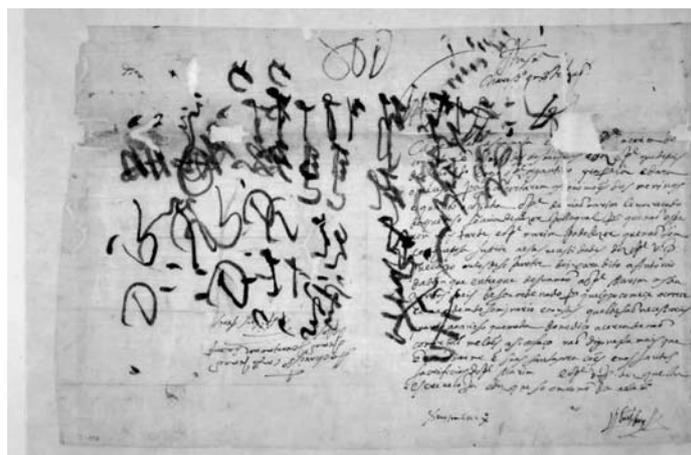


図3 ジェロニモ・ヴァス宛てルイス・フロイスの書簡

フロイスの自筆自署の書翰は、すでに全世界で28通の所在が確認されていて、歴史学者松田毅一によれば、これは29通目となる。

中村質によればフロイスの手紙は1586(天正14)年の夏、フロイスの京都滞在中もしくはそれ以降、イエズス会のジェロニモ・ヴァス修道士に宛てられたものだ。それに先駆けて、ジェロニモ修道士はフロイスに手紙を送り、セミナリオ内の少年たちの衣服の不足や十分でない食糧の窮状を訴えている。しかし、フロイスの回答は思わしくない。以下は中村が読み下した書状の主な内容の要約と、関係する人物の紹介である。

少年たちの衣服の繕いについてのコエリヨが手紙を拝受しました。それについては、パードレ・オルガンチーノがそちらに赴いて、少年たちの着物を繕うのに必要なものを与えるとのことです。また賄方については、パードレ・ダミアン・マリムが申し上げることのできるのは、これらの必需品を補給する手立てがないということだけです。

手紙の中には、オルガンチーノやダミアン・マリムなど当時、日本で布教活動にあたった宣教師の名がみえる。宛名のジェロニモ修道士については本文ですでに記しているが、1579年または1580年に日本でイエズス会に人會したポルトガル人で、安土以来、畿内のセミナリオの教師を務め、1587年伴天連追放令で畿内を追われ、同年長崎で死去した。

オルガンチーノは1570年に渡来したイタリア人宣教師である。主に畿内での布教活動で活躍したが、伴天連追放令で小西行長領の小豆島に潜伏した後、長崎に移った。この間、京

都南蛮寺を建て、1581（天正9）年には安土にセミナリオを開校。1583（天正11）年本能寺の変・安土城の焼失の後、高山右近領の高槻へ。さらに1585（天正13）年右近の明石移封によりセミナリオ閉鎖。1586（天正14）年大坂に移され、さらに長崎に移った。

同じくフロイスの手紙に登場するダミアン・マリムは、1583年渡来のスペイン人である。1586年、イエズス会日本準管区長を務めた司祭、ガスパール・コエリヨの秀吉訪問に伴って、有馬のセミナリオから上坂。1586年9～10月（天正14年）、大坂セミナリオの運営と講義を担当した後、1592年には長崎に移り、1598年マカオで死去したとされる。

安土セミナリオの創設当時の生徒は上流階級の子弟に限られ、生活費は自己負担が原則であった。高槻に移ると、領主の右近がセミナリオの維持費を補助し、衣服、食料、その他の必需品を充てがった。ところが、右近の明石移封でその援助は絶え、生徒たちの生活は困窮していった。その後間もなく1587（天正15）年7月、豊臣秀吉のバテレン追放令が出る。秀吉のバテレン追放令は、キリシタン大名を危ういものとした。高山右近は領地財産を捨て信仰を守る道を選んだ。

先に述べた天正遣欧少年使節団が長崎に帰港したのは1590（天正18）年7月である。キリスト教の理解者であった織田信長はすでに亡く、4人の少年の前には豊臣秀吉のバテレン追放令が立ちはだかっていた。その後、伊東マンショは長崎で病死。原マルチノはマカオ追放。中浦ジュリアンは殉教。千々岩ミゲルは棄教（最近これを否定する説が唱えられている）。8年の歳月は彼らの運命を大きく変えていた。

刻一刻と変化する歴史の流れと息づかいをこの書翰は物語っている。

### 3) 加賀松任町惣中言上書

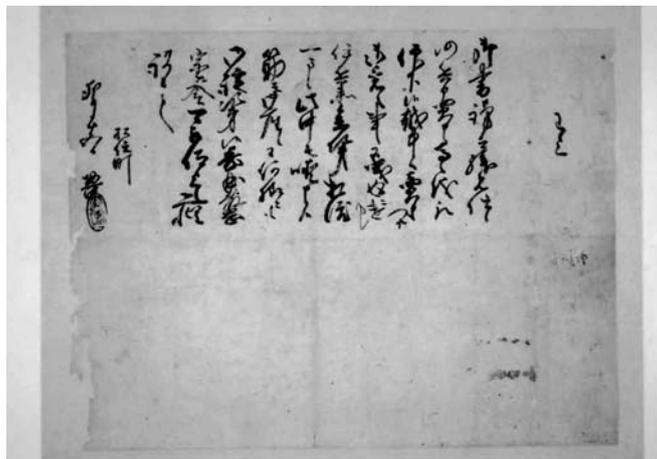


図4 加賀松任町惣中言上書

## 原文

「御書謹而拝見仕候、  
仍兵部買申候馬之儀被  
仰下候、越中へ売申候へ共、  
御意之事候間、曳返二遣申候、  
伊兵衛参次第和渡  
可申候、此中も暖申候  
筋モ御座候間、何様二も  
御綻次第候、委曲藤岡  
宗誉可被仰上候、恐惶  
謹言  
松任町  
卯月十五日 惣中」

書状の大意は次のようになる。

「謹んで書状を拝見しました。兵部が購入した馬は一度は越中へ売却しましたが、御意の申しつけで、(越中との約束は反故にして)馬を引き渡すことにします。色々な意見もありますが伊兵衛が参り次第、引き渡します。」

これを文字面で見ると年次、誰に宛てた書状かは不明である。『エヴォラ文書』の下張りを手がかりに宛先名を割り出すとその人物は、先に挙げた豊臣秀吉の有力な側近、右筆安威五左衛門了佐が有力視されている。とすれば、当然に御意は公儀、秀吉ということになる。

1585(天正13)年2月、前田利家は、秀吉の佐々攻略命により、船舶の領外出航を禁じている。つづいて4月2日、秀吉は上杉景勝に5月に越中へ出陣する旨を告げている。つまりこの書状は、これらの動きと関連する文書ではないかと中村質はいう。日付の卯月15日は1585年4月15日という推測も成り立つ。「言上書」は、秀吉の意を受けた安威了佐が、越中の佐々氏との契約の破棄を求めた書状を松任町惣中(町のまとめ役)におくり、松任町の惣中が安威宛に、これを了承したという返事をしたものと思われる。

## 松任町のエピソード

「下張文書」には歴史を旅する醍醐味がある。ここで、松任町文書にまつわるエピソードとして玄任の妻の話を紹介しておく。

松任町惣中が心変わりしたのは秀吉、あるいはこの時期、秀吉と表裏一体であった利家の威光によるものであろうか。この書状に秘められた惣中の“心”を読むにあたっては、松任町の歴史的背景に触れる必要がある。

金沢は戦国の序章から一向一揆の盛んなところだった。1488年、加賀の守護富樫政親は一向一揆の攻撃を前にして自決。以後、松任城は一向一揆の旗本鏑木氏の居城となった。一

向衆の勢力が隣国の越前に攻めこむ勢いまでとなった時のことである。

永井路子（1972）氏の『日本史にみる女の愛と生き方』に次のような話が載っている。

「敵陣へ進む足は浄土へ行く足じゃ、もし退却するようなことがあれば、その足は、すなわち地獄へ行く足じゃ」。1503（文亀3）年、指揮をとる僧たちの叱咤の声を背に、一向宗徒の農民たちは敵地めがけて突進した。だが、戦いに利あらず。越前の支配者、朝倉貞景の猛反撃をうけて敗退。景気よく戦意を煽っていた僧侶たちも、こそこそ逃げかえった。しかし、このとき、ひとり敵地にとどまり奮戦した土豪がいた。石川郡の玄任とその旗の下に武器をとった松任組の一団300人である。加賀松任町文書には、全員壮烈に戦死したとある。

加賀へ逃げかえったリーダーの僧侶のところへ、残された玄任の妻がやって来て、声をあげて泣き悲しんだ。僧侶は「さぞや辛かろう、しかし、ご亭主は、教えを信じて戦い死んだのだから極楽往生まちがいなし」としきりに彼女をなぐさめた。

すると女房は、きっと顔を上げ僧侶に向かって言ったのだ。夫と死に別れたのが悲しくて泣いているのではない。夫は、一步もひかずに戦った。だから極楽往生は疑いない。なのに、あなたは味方を見捨てて逃亡した。「逃げる足は地獄へと行く足じゃ」、あなたはそうおっしゃった。するとお坊さまは間違いなく地獄行き、それがいたわしい、と。このエピソードの“痛烈な皮肉”は指導者たる僧侶の欺瞞的な仮面を見事にひん剥いたと永井路子氏は書く。

佐々への売買契約を破棄し、秀吉・前田陣営に馬を売り渡した松任町惣中のこの決断は、ただ単に佐々と秀吉、前田を天秤にかけたものではない。歴史が示してきた事実を素早く計算し、答えを導き出した高度の政治的判断だった、と永井路子氏は言う。さらに永井氏は戦国の世を生きた町民のしたたかさをも示す国宝級の文献であるとも言う。

#### 4. 新たなプロジェクト、ポルトの南蛮屏風下張り文書

2014年5月2日、安倍晋三総理大臣がポルトガルの首都リスボンを訪問、翌3日、天正遣欧少年使節団ゆかりのエヴォラ大聖堂も見学した。500年近い日本とポルトガルの歴史の中で、初めての現職の総理大臣訪問だった。この訪問の際、安倍総理はエヴォラ古文書館で南蛮屏風下張文書修復プロジェクトの説明を受け、筆者が1998年に修復した「下張文書」を視察した。その後、日本、ポルトガル両国首相により発表された「共同コミュニケ」の中で「5世紀に亘る歴史に基づく両国史料館同士の交流を強化」が記述された。

このことがきっかけとなって、ポルトのソアレス・ドス・レイス国立博物館から「当館が所蔵する『南蛮屏風』に大量の下張りが存在するようだ。一度調べて欲しい」とリスボンの日本大使館に連絡があった。南蛮屏風は16世紀末から17世紀初めに制作されたスペイン、ポルトガルの交易の様子をモチーフにした屏風である。南蛮船や南蛮人、象、虎、アラビア馬などがモチーフになっているという話だった。



図5 南蛮屏風（ソアレス・ドス・レイス博物館所蔵）

ポルトはリスボンに次ぐポルトガル第2の都市で、ポルトワインの産地として世に知られる。2014年7月、筆者はソアレス・ドス・レイス国立博物館を訪れた。南蛮屏風は6曲1双12扇の屏風で、「屏風」は紛れもなく典型的な南蛮屏風である。「屏風」の絵は2000年～2001年にかけて日本の東京文化財研究所で修復され、その際、下地は新しいものに取り換えられた。ソアレス・ドス・レイス博物館が調査を依頼したのは古い下地の下張り文書である。下張りは通常1扇の中に200枚から300枚の半紙大の反故紙が使われていると先に述べた。このことから6曲1双の当該の屏風は3,000枚前後の下張り文書が存在していると思われる。

11月には、京都国立博物館の修復工房の4人の技術者の協力を得て解装作業を進め、その一部を日本へ移送した。

2019年9月、修復を了えた「下張り」をソアレス・ドス・レイス博物館へ返却した。その中の下張りの1枚を紹介しておく。



図6 宇治火災の聞書覚書（下張りでは別々に切断されているが元は上下で一紙）

## 原文

「聞書覚書

元禄十一年寅三月三日美己ノ下刻宇治一ノ坂  
酒多ヲリ火出宇治民屋大方類火人廿人余  
死ス是者舟ニテ向□ル時塔ノ辺ニテ船  
折帰ル故ニ也 此時 平等院楼門焼失内裏ノ  
門も焼失ス楼門昔ノ門タリ古キ額モ在之  
此門ノ二階ヨリ大き成火ノ玉ニツ出テ宇治川へ  
入ル、此火ノ玉ニ驚テ船中サワキ船折帰ルよし  
宇治ノ人物語ス 此時宇治ノ家過半焼跡所三十一  
許伝 此時宇治橋懸直ル」

元禄 11 (1698) 年 3 月 3 日巳の下刻(午前 11 時近く)に宇治の一の坂、酒多(家)から出火。宇治の民家を焼き尽くし、20 名余りが亡くなった。平等院の楼門、内裏門も焼失。その 2 階から火の玉が川へ飛び、船が宇治川を越えるときに、船に乗った人たちが大騒ぎし、折り返すときに事故となった。この火災で宇治の家屋の過半数が焼失したと記されている。

## おわりに

通称「エヴォラ屏風」の下張りとポルトのソアレス・ドス・レイス博物館の南蛮屏風の下張りについて述べてきた。「エヴォラ屏風」の絵柄は定かではないが、6 曲 1 双であるとする説が有力である。筆者が修復したのは約 100 枚。内蔵されていた下張りの 30 分の 1 にも満たない。

ポルトの南蛮屏風の下張りは約 200 枚を修復した。これも少なく見積っても 10 分の 1 にも満たない。「エヴォラ屏風」の下張りは、2,000 枚以上はあったであろう反故紙が行方不明である。これをまず発見しなくてはならない。

ポルトの未修復の下張りについては、長期に耐え得る保存状態にしてある。

まだまだすべき作業は気が遠くなる大仕事である。もちろん筆者だけで成し得るものではない。長い年月と費用と、何よりもこの仕事に挑む人材が現れなくてはならない。

この地道な仕事は、新たな日本の歴史の発掘に繋がる可能性を秘めているのだから。

尚、「エヴォラ屏風下張り文書」については星槎大学紀要『共生科学研究』10 号に「雑学ノート『歴史を歩く』』として発表している。本稿はそれを下敷に、併せて新聞、雑誌などに寄稿したものを含め、加筆したものである。

最後に「下張り文書」の移送について記しておきたい。

「下張り文書」のポルトガルから日本への移送は、ポルトガル文化省の許可を得るのに難

行した。イザベル・シッド博士の来日を仰ぎ、修復作業を担当する国立京都博物館の工房、岡墨光堂を視察いただいた。知日派の歴史学者で欧州議会の議員もされた、ポルトガル日本友好協会の元会長ペドロ・カナヴァロ博士には、何度も文化省へ足を運んでいただいた。旧知の元ポルトガル大統領国家最高顧問ラマーリヨ・アエネス氏もポルトガル政府へ理解を求めてくださった。

日本側では日本ポルトガル友好議員連盟の相沢英之氏、谷垣禎一氏の歴代の会長も力を貸して下さった。本プロジェクトは、まさに政・官・財・学の協力を得て成し得たものである。

## 引用文献

海老沢有道・松田毅一. (1963). 『エヴォラ屏風文書の研究』, ナツメ社.

中村質. (1988). 『近世長崎貿易史の研究』, 吉川弘文館.

伊藤玄二郎編著. (2000). 『エヴォラ屏風の世界』, 「エヴォラ屏風」修復保存、出版実行委員会.

伊藤玄二郎. (2014). 雑学ノート「歴史を歩く」星槎大学紀要『共生科学研究』N0.10, pp.10-16.

五野井隆史. (2000). 「秀吉の周辺におけるキリシタンの活動」『エヴォラ屏風の世界』修復保存、出版実行委員会.

永井路子. (1972). 「玄任の妻」『日本史にみる女の愛と生き方』, 新潮文庫.

小牧近江. (1930). 『異国の戦争』, かまくら春秋社.

「加賀松任町惣中言上書」『前田利家小百科』, 2001年, かまくら春秋社.

「南蛮屏風下張文書のロマン」『星座』, 71号, 2014年, かまくら春秋社.